

平成25年度 みんなで学ぶ景観まちづくり教室

講演演題：島原市におけるまちづくり



講師：猪原 信明（いのはら のぶあき）氏（合資会社猪原金物店）

日時：平成25年10月16日（水） 18時30分から20時30分まで

場所：鹿児島市役所東別館11階 1101会議室

【以下講演要旨】

私は、長崎県の島原市から、今日、台風の後、船に乗って初めて来ました、猪原金物店の猪原信明と申します。本日はどうぞよろしく申し上げます。

私は、今では「まちづくり」というのは行政がやるものではないと思っておりますが、以前は、まちづくりとは大体、まちづくり課とか景観課とか都市計画課がやるものだと思っていました。

雲仙普賢岳噴火災害が20年位前にありました。恐らく20代の方はほとんどご存じないと思います。それでなくても商店街というのが消えようとしている時代で、その辺りからまちづくりに目覚めていく事になったのですけど、全国あちこち行きました。

やっぱり肌で感じないことには、(単に) お話をお聞きされただけでは、多分、今日話したことは3日で忘れられると思います。

ですから、一番有効なのは、その現地に行って空気を感じて、五感を使って吸収し身に沁み込ませる。それが本当のまちづくりじゃないかなと思っています。

島原藩は7万石で人口は4万8千人位ですかね。

この**普賢岳**、1,400m越えますもんね。

(元は)1,300m位だったのですけど、噴火しまして高くなっています。上が尖がっていますよね。「溶岩ドーム」は、何億立米といいますか、東京ドームの何十倍何百倍とあるらしいですけど、一応噴火は休息して、この状態で不安定なままです。当時は、自衛隊に来て頂くなど、新聞やテレビで報道された通りです。20年位前になりますが、鹿児島の方々にも多くのご支援を頂いて、この場で失礼ですが、本当にお世話になりました。

まちづくりをやろうとしたのは、これだけの物心両面でのご支援を受け、「島原の人間がかわいそうだ」とか「何とか頑張れよ」という応援を頂いたのに対して、島原の人間が黙っている訳にはいかんだろうと考えました。島原の心意気を全国に発信しなければという思いもありました。

島原市ってどこにあるかご存知ない方もあると思い、**地図**を急遽追加しました。島原市はここで、普賢岳が島原半島の真ん中位です。島原市からフェリーで熊本まで渡って、新幹線で鹿児島まで49分です。びっくりしました。鹿児島から博多まで1時間20分です。



鹿児島は新幹線が出来てどうですか？便利ですよ。鹿児島の大きさなら大丈夫でしょうが、実はアクセスが良くなることで逆に衰退していく町が非常に増えています。ストロー現象と言います。「便利」は確かにいいことなんです。ただ、例えば、九州だったら島原から県央の諫早まで車で1時間かかる。みんな「不便、不便。」って言っているんですね。将来、高規格道路が完成したら諫早まで20分になります。

でも、例えば住民の方はどうですか？日用品や食糧などちょっとしたものを買う場合は、地元のスーパーなどで済ませますけど、もし5万円とか10万円以上の高価格の物を買う場合は、大都市に大手メーカーとかブティックとか集中していますよね。それが1時間20分で行けるってことになった時に、消費者がどこに動くかって事ですね。それが非常に心配な事で、どうすればいいのか？

結論は「目的」を作るしかないと思うんですね。鹿児島に。島原に。目的があれば、日本人は、バリ島とか、チベットとか、或いは屋久島とか沖縄とか、お金と時間を惜しみなく使って行くじゃないですか。魅力のある目的をしっかりと作れば、来るなって言われても不便な船や飛行機でやってきます。人間は切実で魅力のある目的の為なら手段を択ばない。では、その目的とは一体何なのかですね。

今からまちづくりの話をしませんが、自分がまちづくりをしながら気づいた事をずっと順を追ってお話していきます。

商店街って、全国「シャッター通り」と言われております。我々の商店街は、アーケードじゃなくて、もっと古い寂れた商店街だったんですね。それでなくても、商店街からロードサイドの大型店にお客さんはどんどん移動していく。全国あちこち周りまわりましたが、アーケードってシャッター通りなんです。消費者を何とか再び街中に戻すにはどうしたらいいのかってことですね。

商店街組合に若い青年部を作って、もう一回昔のような賑わいに取り戻したいとの思いがあり、結成しようとした矢先に噴火災害です。もうダメだと思いました。200年前にも噴火災害が起きて、普賢岳の手前にそびえている眉山（まゆやま）が、地震で一瞬で崩れ落ちて1万人が死にました。我々も200年前と同じように死ぬんじゃないかって覚悟をしました。

もう失くす物がなくなったんですね。火砕流が起きて空から灰がどんどん降ってくる。鹿児島もそうですけど真っ暗ですね。そういう状態で自衛隊のヘリコプターや装甲車がどんどん来て戦場みたいになり、もう島原市はダメだと思いました。ましてや商店街は消えようとしている。「泣きっ面に蜂」状態です。

それから、ある程度安全だっということが九州大学の教授とかが発表されてから、何もなくなった状態で商店街の青年部が集まったんですね。それで、「どうしようか？」ということで、前の宮崎知事じゃないけど、何とかせないかんと集まった。安全が確認された最初の年に湯布院に行ったのです。あまり大きい所を見ても参考にならないので、湯布院の小さい商店街に行って、まちづくりを見せてもらったのですが、湯布院は実は「民間人が変えた」と知って、愕然としました。行政がやらなくちゃ、お金とそれだけの力は行政しか出来ない、民間が出来る訳がないだろうと思って行ったら、やっぱり民間人がしているって聞いて目からウロコが落ちました。

「まちづくりっていうのは本来、民間人がするものだ」と。町衆ですね、つまり住民です。だから、「行政が当然やるべきだろう」と言いますが、今の主流はですね、地元の人間の中にどれだけ住民のやる気のある人間がいるかなんです。

はっきり言って、行政の方で就職したら「法律を守れ！」って最初から聞かされる訳でしょ？守秘義務と法律を守れと、縛りや足枷をしっかりとされる。なかなか自分はしたくても出来ない、言いたくても言えないというのがあります。そんな中で、民間人っていうのはもうある意味で、犯罪をおかさない限りは自由ですから、出来る。

鹿児島もこれだけの立派な歴史や文化があって、本当に日本を変えた地域ですよ。

湯布院に行って目からウロコが落ちました。3人のバカがいれば可能だと聞いたことがあると思いますが、よそ者、地下（じげ）者、若者の3人がいれば、街は変わると聞かされたんですね。その地域の「風土」は、風の民（よそ者）と土の民（地元民）でできている。我々はもう失うものはないし、まちづくりをやるうってことになって、何人かで集まってスタートしたんです。

最初に先進事例として湯布院に行って強烈なショックを受け、翌年は、熊本市の新町に行きました。やっぱり高齢化が進んでいました。そのまちづくりのリーダーの方に「私は老人を病院のベッドで死なせない。この町で老人を殺す。」って言われたんです。つまり、町内や商店の方などがご年配になっていく訳ですよ。彼らは隠居して家の裏側に引きこもってしまう。

そういう人達をもっと街中に引っ張り出して、元気になってもらおうってことで、その街の路上で色んなコンサートを仕掛けたりして。その為には縁台がいる。鹿児島では縁台っていいですかね？それをお店の前や街角に置く訳です。ご年配になるとそんなに長くは歩けないから、（そこに）座ってもらう。店の中に入ってこなくても、店先に縁台を置いて座ってもらうってことで、それで街の中でコンサートをしてご年配の方に出てきてもらう。そういう、人間に優しいまちづくりをしています。

オリジナルティーがないとダメだと言われましたが、最初は猿まねです。そこで、縁台を作って各店の前に置いたと聞いたので、帰ってから慌てて（縁台を）商店街で20脚作って、自分の店の前にも置きました。それで、自分の店に入って来てもらわなくてもいいから、その通りに皆さんが来られたら、観光客の方もご年配の方も自由にお座りください、という発想に変わりましたね。これが新町で学んだことですね。

（大分県）日田の豆田町にも行きました。滋賀県の彦根、長浜とか四国の内子町とか萩や津和野など全国あちこちに行きました。

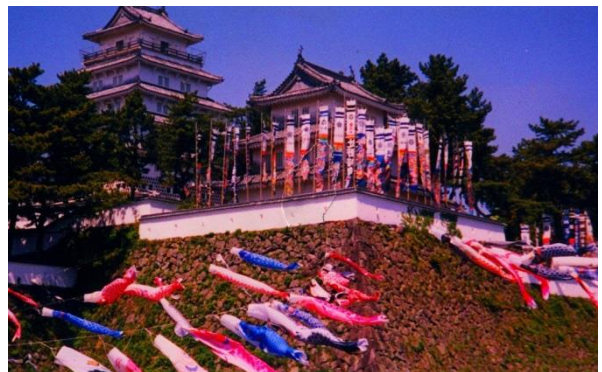
長浜に行った時はかなりショックを受けたのは覚えています。いわゆる黒壁ってご存知ですか？「株式会社黒壁」と言って第三セクターで国内唯一の成功した例です。事業を起す前に、アーケードの通行量調査をやったらいいんですよ。そしたら、一時間で人が1人と犬が1匹っていうことだったらいいんですけど、今は年間数百万人ですかね、それを民間人がやったんですね。そんな莫大なお金を持っている訳でもなく、力がある訳じゃないけど、それが知恵なんですよ。

で、その町のストック、つまり大資本がいくらお金をかけても作れない、元々その町にある、時間をかけて出来上がった歴史資産や文化。それをいかに生かして、所謂ドレスアップしてプレゼンテーションをするかで、町の流れが全然、変わってくる。

I. 島原市の事例①

最初に言いましたけど、新幹線が通る福岡市には150万人の人間がいる。その人たちを鹿児島に引っ張り込む戦略、つまり目的を作ればいい訳ですね。地元消費に加えて外貨を稼ぐのです。

島原も（来訪客が）多いですよ。熊本、福岡（からの人）も多い。最近、うちの界隈やお店も外国の方が段々増えてきましたね。パンフレットの一番後に英語バージョンを入れた位なんですよ。僕は英語が堪能な方じゃないけど、単語で大体通じます。文法なんて無視です。韓国、中国、台湾、マレーシア、イタリア、フラ



ンス、ドイツ、アメリカ、カナダの方でもどこの国も英語は判りますからね。

最初にやったのが**島原城**です。島原城に元気印の、全国から鹿児島県の皆様からも沢山の支援を貰ったのに対して、我々も元気印で応えようじゃないかってことになって、島原城に**こいのぼり**や**武者のぼり**を揚げる活動を始めました。

ここら辺からもモチベーションは上がっていきますよね。メディアの方、新聞やテレビがこれを取り上げてくれて。新聞とかテレビというのは判官びいきなんですよ、どちらかといえば。だから行政が何かやっても取材にこないでしょ。でも、民間の人がちょっとした事をやればパッと話題になる。だから、そういうのを逆手に利用してやる。同じ町内とか地域で（活動を）知らなかった人もテレビを見て初めて自分の地区のことが判る。そしたら、みんながサポート体制を取ってくれる。意識が変わっていくんです。そういう風なことで、メディアをいかに味方にして引き込むかっていうのは一つのテクニックですね。こういう事をやり始めました。

次に、「街並みウォッチング」っていうのをやったんですけど、鹿児島県の良さを一番分かってないのは鹿児島の人です。分ります？自分たちの一番素晴らしい所を知ってないのは自分達なんですよ。これは島原でも、我々でもそうでした。居酒屋で「こげん田舎は…」って愚痴る訳ですよ。自分たちの良さが分からないのですよ。鹿児島だってどうですか？私が見て素晴らしい街だと思ったし、歴史も素晴らしい。本日の昼間に鹿児島市内の色々なところを見せてもらいました。非常にコンパクトにまとまった一つの立派な文化圏を作っていますよね。

分らないから、外部の方に来てもらって見て貰うんですよ。これは大学生でもいいですよ。具体的に僕達は何をやったかという、使い捨てのフィルム式「撮りっきりカメラ」というのがあって、それを学生に配るんです。昼間に周らせて、気になる所とか面白い所を撮ってくれて頼んで撮ってもらったんです。回収してすぐに現像し、それをパワーポイントにして、夜、住民を集めて（発表会を）やりました。

なぜこれが面白いのか？と聞いたら我々の発想と全然違うんです。「何でこんなのが面白いの？」他所から来た人は感動するんですよ。つまりさっき言った通り、鹿児島県の良さを一番知らないのは鹿児島の人だってことを、早く鹿児島の人に教えてあげないといけないって事ですね。それは島原も一緒です。

だから、ここに私たちの上の町通りの独自性の資料をたまたま出したんですけども、これは見ても別に面白くないと思います。（同じように）鹿児島の人間がそもそも島津藩で、最初はどこから来たのか。どういう歴史を辿ってきたのか。自分は一体何者か、先祖は何なのか？というアイデンティティーを、まず知らない事には自分たちの誇りは生まれませんよね。

私達は自分の住む通りが一体いつ頃出来たのか、どういう流れで今こんなに衰退してきたのか知らなきゃ、ってことで色々調べました。

そのように地道に色々な活動をする中で、島原は噴火災害で大変だったということもあり、国も県もいろんな補助制度の優先順位を上げてくれたんです。

で、街路灯の建て替えをやったんです。街路灯って、高い所にポリカーボネートのオレンジ色（カバー）の水銀灯があるじゃないですか。それが老朽化していたので新しい街路灯を作るって企画で、商店街の街路灯の建て替えを平成9年にやったんです。

今までの常識では、夜、いわゆる上から照らさないといけないって発想ですが、どうするか40回位皆で集まって協議しました。「陰影礼賛」（谷崎潤一郎著）という、建築家の方はご存知だと思いますけど、日本人っていうのは明るい所よりも陰に美を見出す民族ですね。今世界中が絶賛していますけど。

そこで、20W位に変えました。全体を照らすのではなく足元を照らすってことです。メリハリ

を付けるんです。そしたら電気代もかからないです。高さがわずか 1.2mの街路灯に島原石を貼って横に銅板のプレートを付けました。これも話し合っ。島原に昔から来た文人墨客の、種田山頭火とかの文化人が島原に関して詠んでくれたものを貼って、それを見て回るイベントをしました。夜は街路灯だけど昼は道祖神つまり「道しるべ」、という二役にしようと取り組みまして、それが街路灯の建て替え工事です。

それまでは商店街の会長とかがカタログで見積もりをとって「これがいいよね。」って決めていた時代だったけれど、我々はそれを決める為に何十回も協議する。そうする事で意識が変わってくるんですよ。自分の店だけじゃなくて、通りや全体のエリアをどうしようかって。それが自分の問題だってことに気付いていく訳ですね。何十回もなので大変です。でも意識を変えるためには大切なことだったんですね、当時は。

それと、これが大正 12 年に出来た理髪館です。この理髪館、老朽化したから壊しますって持ち主の情報が入ったものですから、これを借り受けました。36 回位会議をして、もちろん補助金も頂きながら修復保全をやりました。この青い理髪館の外壁、この色を決めるだけでも相当時間がかかりました。この建物に民間のカフェ経営者に入ってもらって今やっています。これが平成 13 年度の国の「手づくり郷土（ふるさと）賞」を受賞することになりました。



次は、すぐ近くの消防団の詰所なんです。青い理髪館と似ているのは、関東大震災の時に家が全部崩壊して、島原にいた大工さんが（関東に）全部行って。向こうで洋館を建てるのが多くて、洋館を建てる技術を身に付けて帰ってきました。その大正 12 年か 13 年にこの洋館が建ちました。



消防団の詰所なものですから、市の建設課の若い担当者が私の所に相談に来たんですよ。「これを全部潰して新しい今風な箱型の詰所にするか、このまま修復して残すか」って、全権委任されたって訳です。もう分りきったことですよ。「これは歴史資産だよ。大正 12 年にできた、そういうドラマがある。これをもし壊してしまったら大変な損失になる。」ということで、「修復保全してほしい。」と言ったら、彼は修復保全の設計に変えてくれました。その後また悩んで来たんですよ。「色をどうしたらいいのか？」と。例えばこれをベージュにしてもピンクにしても絶対に市民から批判がくるんです、十人十色ですから。話は簡単で「歴代の消防団の分団長をした人に全部聞け。」と言ったんですよ。それで（担当者に）「あなたは何色にしたいの？」と言ったら「薄いブルーにしたい。」と言うので、「じゃ、『私は薄いブルーにしたいけど、元分団長はどうですか？薄いブルーでいいですか？』と聞いて『ああ、いいよ。』って言ったら、それをちゃんと議事録に記録しなさい。」と言いました。それを最低 3 人位に聞けと。そしたら、市民から文句が出て、歴代の地域防災に関わった人達が「青がいい」と言ったとお墨付きを提示する。これも今となつては島原の大切な景観資産です。

次が道路です。平成13年度、国の補助事業「街並み環境整備事業」の適用を受けようということで、最初に道路の整備事業を民間と行政がタイアップして考えよう。普通の道路じゃなく、付加価値の高いものを、住民の意見をいれて作ろうじゃないかって話があった。

私有地と道路の境界線、いわゆる排水溝ですね。それまでは戦後出来た30cm真四角の排水溝に、湧水と生活排水を捨ててたんですが、それをセパレートして、宅地側は湧水が流れています。

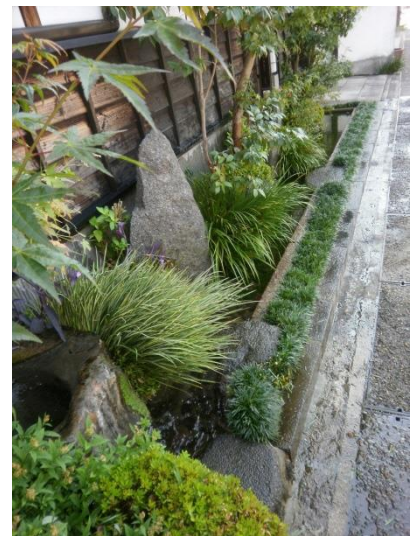
うちの速魚川（はやめがわ：奥の突き井戸（地下110m）から毎分150ℓの湧き水が自噴して流れる幅1mほどの小川。めだか、ハヤ、モエビ、ヒメダカ、サワガニ等が生息。わさびやクレソンもある。）は（写真の）車の奥ですけど、左側には湧水が何か所かあり、それが流れ込む。生活排水はこの車道側の深いところに流れ込む。



で、この通りは全長180mで勾配が1.8mで、奥の方からずっと流れてきているんですね。これをなぜ作ったかという、手前側にも商店・民家があるんですが、引き込もうとしたら水を引き込める訳ですよ。側溝に穴をあければ。ロータリーしてまた戻せばいいんです。そしたら、あちこちで水を見せることが出来るじゃないですか。水がもったいないです。

有効利用するためにセパレートを提案し、それを市が聞いてくれて、湧水と生活排水の二つに分けた**湧水道**（ゆうすいどう）を作りました。この下流の人たちは今後この水を利用できます。そういうシステムを作っておけば、30年後、50年後、誰かが湧水を使えるわけです。

そこから（湧水）を取り込んだ時計屋さんでは、その（水路の）中にハヤとかの生物がいます。こういうのを街中にどんどん作ろうってことなんですよ。湧水があるから可能ですね。**Show the water** 運動です。



これは、**連鎖反応**が動き始めるってことですね。真ん中が**湧水道**、左側が道路ですね。ここは元々、湧水があったので自分の湧水を使っている。私、犬の散歩をするんですよ。犬が水を飲んだりするんですけど。綺麗にちゃんと管理して頂いているから水に緑が映えますよね。

鹿児島市の電停の緑の植栽もすごく感心したんですけど、同様に熊本も何か賞をとったとかの話を聞いているんですけど、楽しいじゃないですか。街中にあると。

これは古い昔からある**酒屋さん**なんですけど、この整備費を、街並み環境整備事業で、個人にも出せないのかと、市役所に随分言いました。うちは、自分の生命保険と同じ額の借金をして、もしも自分が途中で死んだらそれで借金が返せるぐらいの予算でやった。



補助金を一銭も貰ってないから行政にものを言いやすいんですよ。それで、「個人で修景をする時に、街並み環境整備事業というのは道路だけじゃなく個人にも出しているところあるじゃない。」ってことで課長にずいぶん掛け合って、個人にも出してくれるようになりました。これが補助金を使って酒

屋を修復保全した例ですね。ここに**犬矢来**（注：京都の町屋などにある軒下の防護柵のようなもの）があります。この犬矢来を、市の職員がアルミの既製品にしようとしたんです。僕はその時すごく怒りました。「江戸時代だから、アルミじゃなくて鉄でしょ。何で本物にしないの？」って言ったんですね。鉄でやったら錆が出るじゃないですか、経年変化で。朽ちていくことを「侘び」「寂び」の美と捉える。それが素敵なんです。そして町のストック、つまり景観資産の一部になっていくんです。

次に、酒蔵でイベントを始めたんです。今もやっています。その中で登録有形文化財っていう制度（注：都市開発などで消滅が危ぶまれる近代建造物を守るため、1996年に設けられた文化財登録制度に基づいて登録される。築後50年以上で、歴史的景観や造形に優れ、再現が容易でないのが選考基準。修理のための設計監理費の補助や減税の措置が受けられる。厳しい規制がある指定文化財と違い、外観を大きく変えなければ改修や改装も認められる。）があるんです。ご存知ですか？日本特有の街並みが消滅するのを防ぐ制度ですね。従来の指定文化財とか重要文化財に指定されると釘一本も打てなくなるので、所有者が承諾を拒否する。だから、文化庁が平成8年に登録有形文化財という、非常に緩い文化財制度を作ったんです。この上の町通りの10物件を登録したんです。一つの物件につき毎年10万円が文化庁から地元行政に来ます。10物件としたら100万円が無条件で国からその行政に来るんですよ。100件登録出来たとしたら1千万円です。査定は厳しくないです。無条件ですから。文化行政は予算が厳しい、厳しいって言っているのに、みんなそういう制度があるのを知らない。

登録有形文化財制度は（建物が）まず築後50年以上をクリアしているか、歴史的景観に寄与しているか、という査定があります。あとは持ち主の承諾書と図面です。それが文化庁の登録有形文化財審議会に諮られてOKが出たら一つの物件に10万円来るんです。古くなったからと壊されていくものが、その予算で登録有形文化財を増やしていくとどうなりますか？街はどんどん変わっていくじゃないですか？ということですね。

持ち主はこれ（銅板プレート）しか貰えません。「登録有形文化財、この建造物は貴重な国民的財産です。文化庁」10物件登録したのでプレート10枚と地元行政に毎年100万円が来ます。

ところが、当店もそうですが、国が指定すると県が寄ってくるんです。国の審査基準に通ったことで長崎県が『まちづくり景観資産』に指定しました。県の景観保全にも貢献したんだと。そしたら県の予算がバン！ってつくんですよ。例えば、屋根がものすごく傷んで雨漏りしてどうしようかって時に、一物件の修復保全に総額300万です。登録有形文化財を修復するのに県の景観行政が乗っかってくるかたちです。国は毎年10万しかお金をあげないけど、長崎県は修復保全のための補助金として300万（正確には県と市が折半）準備してくれるんです。そしてこれは、所有者の事情によっては壊してもいいんです。罰則規定はありません。ただし、ちゃんと1年前に壊すってことを行政に申告して、行政から国に言っておけば、壊してもいいんです。緩い登録有形文化財ですね。登録有形文化財制度は覚えておいてください。これは、近くに古い思入れがある昔からの建物があるとか、煙突やウダツでもいいんです。使えます。絶対に使えます。

Ⅱ. 猪原金物店

（写真は）うちの外観で、表が**金物屋**ですね。手前が（金物店横に作った）速魚川。店先に湧水が出るようにしました。ずっと下を配管させて川の方へ。余った水は上から流して、最後にドレーン、排水溝があって、これが湧水道に入ってまた下流の人が使



えます。こういうことをやっています。

その後ね、色々なことをやっていかないといけないんです。アイデアというか。うちの家内が寿司屋（で扱うもの）は魚へんだから、金物屋は金へんで（店先の大きなガラス窓に白文字で）出してみたら？って、割と思いつきで言うのだけどそれだけなんです。家内は。誰が作るの？私は、漢和辞典を見て、金物屋の道具に関係する金への漢字を色々探しました。パンフレットにもしてありますけど。（「錘」とか「鉋」とか）読めます？だから、ちゃんと読み仮名、付けてますよ。けど、これをお客さんが見たときに感動するんですよ。話題づくりです。これを店先に貼っています。こういうちょっとした事をやっていくんですよ、コツコツと。大したお金はかかりません。店先はこんな感じです。

店内はめちゃくちゃです。どこに何があるか分かりません。いいかげん。整理されてない。お客さんはどこに何があるか分からないんですが、それでいいんです。宝探しみたいで。実はこの展示棚はほとんど貰い物です。スーパーの外に捨ててあったんです、バーンと。山崎パンのディスプレイとかある訳ですよ。木で作ってあるのが捨ててあるんです。これいいじゃん！って、オーナーに「これどうするの？」「捨てます。」「貰っていいですか？」って聞いて、それを貰ってきて外部を磨いて、塗って、すぐには使わないでまた外にさらすんです。それを店内のディスプレイにしてるんです。そんなことばかりです。お金がない、力もない。そしたらもう、汗と知恵を出すしかない。汗と知恵の方にむしろ今はドラマがあって、皆が注目する時代になってきていると思うんですね。



当店で飾ってある「まるきち」（の字のある透かしガラリ戸）は、初代が岡山から来て、吉備団子の吉なんですね。これはギャラリーじゃなくて、茶房の裏の食事をするところの建具の戸なんです。で、擦りガラスで作らせるとすごいお金がかかるんだけど、半透明のシールを貼ると擦りガラス風に見えるんですね。そんなにお金がかからないです。お客さんは勘違いするんです。やっぱり古い店だから、金をかけて擦りガラスに書かれていますねって。それでいいんですよ。

来店されて知り合った人が、当店のイメージポスターを作って持ってきてくれたんです。うちの店のコンセプトは、「こだわって本物。使って一生モノ。」。使い捨てる時代はいつまでも続きませんよ。道具とかも大切に言えば一生使えるってことですね。理想は持続可能経済です。

この商店街のコンセプト、基本理念、テーマをずいぶん議論しました。それで、東京からコンサルタントに来て貰ったんです。そのコンサルタントは「私は来る前にアーケードの商店街だと思ってました。ちゃんとしたね。ところがお叱り覚悟で言いますけど、これは商店街ではない。申し訳ないんですけど、もし生鮮三品の店をここに持ってきたら、昔の賑わいが取り戻せると思っていますか？無理です。だから、あなた達は一生懸命勉強して、例えばケンブリッジ大学に受かろうとしてるけど、無理。それよりも優れた職人になりなさい。或いは農民になりなさい。」そう言われると逆にすっきりするんですね。「だから、昔の賑わいを取り戻すことは出来ないけども、今からの時代は、心豊かな時間を過ごせる街に変えなさい。」という訳です。

アーケードとか商店街は、早く買って次のお客さんに来てもらわないと困る訳でしょ。それが経済効率ですよ。それに逆行している訳です。『心豊かな時間を過ごせる街』ってことで、平成8年に方向性を変えたんです。これがコンセプトですね。総論です。具体的には、商店街はこれだけの独自性を生かしたまちづくりを進めるって事で。独自性ってなんなのかって、歴史ですね。

島原の乱、島原半島住民全員がキリシタンだったんですね。それまでは仏教徒と神道だったんですけど、ポルトガル貿易で力をつけた有馬晴信ってキリシタン大名が、農民全員をキリスト教に変えたんですね。で、悲劇はその後です。豊臣秀吉が、結局、ポルトガルは怪しい、イスパニアは怪しい、イギリスも怪しい、フランスも怪しいと。当時の欧米列強は最初に宣教師を派遣して、マインドコントロールをした後に、軍隊を送ってきて植民地になっている訳ですね。日本も早晚そのようになると見抜いたんです。ところがですね、オランダだけはビジネスの話しかしなかった。だからオランダは許して長崎の出島で江戸時代まで（交易を）許したんですよ。ところが、ポルトガルは逆鱗に触れて、有馬晴信は結局、延岡に左遷されたんです。農民は全部キリシタンです。徳川家康の関ヶ原で功名のあった松倉重政という人物が次に来て、島原城を築城したんです。

駆り出されたのは農民で、わずか7年間でユンボもダンプもない時代に、作ったんですよ。そりゃ暴動が起きますよ。おまけに寛永の飢饉がありますからね。頭の中では、現実には地獄だから、死ねばパラダイス（天国）に行けると思っているんですよ。いっそ殺してくれ、早く楽にさせてくれて。そういう人たちが天草四郎を中心に一揆を起した。自分たちが作った城を攻めるわけです。幕府軍なんて農民一揆をなめてたんです。ところが一揆軍に有馬の侍達が残っていたんです。で、島津も幕府軍側で攻めるんですね。原城の3万7千人、かわいそうですよ。前に仏教徒と神道だったのが、キリシタンにさせられて、そこの藩主が出ていっちゃって、気付いたらキリシタンは駄目だ、城を作れてと言われて、飢え死にでしょ。そして、クーデターやって皆殺しです。

そのおかげで、鎖国が始まった。それだけ、鹿児島と島原って日本の歴史を変えてますね。実は、有馬晴信が出ていった後に、しばらくの間、島津が統治してるんです。知ってました？そんなことを知ると面白いです。島原の独自性のポイントはこんな歴史と街並み、自然があります。馬鈴薯の生産が一番多い所は北海道ですが、二番目は長崎なんですよ。だから島原半島は長崎県の穀倉地帯と言われている。山のものも海のものもおいしくて、それと人情なんです。田舎の人特有な、道を尋ねるとわざわざついて行って教えてくれるような人が一杯いるということです。

それともう一つは湧水です。島原は平成8年に環境庁から「名水百選」に選ばれている。その中でも、街中で飲める無菌の湧水は全国で島原だけなんですよ。他のところの湧水はほとんど菌がはいっている。今は地下40m位までの水は危ないと言われてます。ダイオキシンや農薬とかにも汚染されてます。そういう特性が、水質調査や大学教授の話などで分かってきたんですね。それで、北海道の羊蹄山の水や神戸の六甲の水、屋久島の縄文水、長崎県の島原の水、この4つはまだ汚染されていないと指摘されて、水をもっと活かしていこうと思った。水を活かしたら動植物だけでなく人間も集まってくる。その後、行政との戦いが始まった。課長を含め判ってくれませんでした。なかなかやっぱり難しいですね、理解してもらえないですよ。

で、あと各論ですね。総論は決まりました。方向性も決まった。いわゆる心豊かな時間を過ごせる城下町にして県内外や外国からも来てもらおう。ゆったりして心豊かにして帰ってもらおうというコンセプト（基本理念）を商店街にはかった。すると各論は反対するんですよ。各論になってきたら皆いなくなる。ご経験あるでしょ、職場とかで？だから私は、各論を実践実行する人しか信じない。言葉でなくて動くことです。誰が何と言ってもこれやりますって動くことです。

私はビオトープを造ろうということで**速魚川**をつくって、わずか25mの水路に湧水を流しました。「水が綺麗でしょう。」って見せるだけじゃ夢がないじゃないですか。それだけ綺麗な水だったら、そこにホタルを飛ばせ



たいとか思う訳でしょ。昔の日本は街中でもホタルが飛んでいましたね。今は山の中の川に行かないとホタルは見られませんね。でも、昔は生活する身近なところで見られたんです。今、お客さんの中で20代の方はホタルを見たことのない人が多いでしょ、実際。びっくりする、エーとか言って。街中でホタルが飛ぶってなれば、それこそ世界中から来ますよね。だから、単に見せるだけではなくて、自然環境、ドイツ語で言うビオトープを作りました。そしたらハヤが、ホタルのエサとなるカワニナがどんどん増えて、海が近くだから清流の匂いをかいでモクズカニが来て棲みつき、上流には沢蟹もいます。

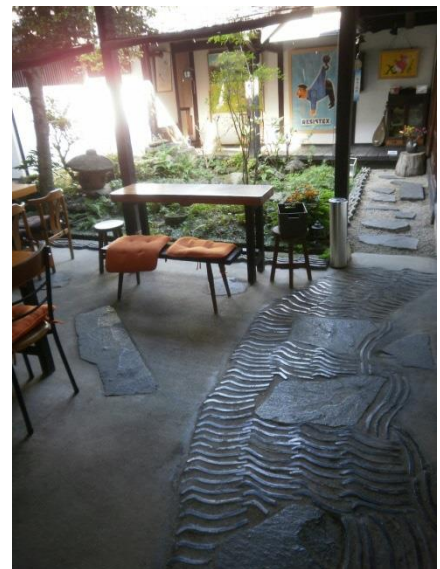
そしてクレソン。どんどん出来ます。観光客が「これ、クレソンじゃないですか?」「食べても、持って帰ってもいいですよ。」「ホントにいいんですか?」「はい、冬以外はどんどん増えるので、ごみ袋に一杯詰めて捨てます。」「えー、売ればいいのに」って言われるけど、そんな時間はない。欲しかったらどれだけでもあります。苦くないんです、甘いんです。最後にピリッとします。

速魚川の下には五つのパイプを埋めています。浄化槽の排水管とガス管、この右下に見えますが、飲料用の湧水を出しっぱなしにしている蛇口の管、湧水にポンプで水圧をかけた蛇口の管、最後は、もし万が一変地異があつて湧水が止まった時に、市の水道から直接すぐに家屋内に市水を引くことが出来る空の管。縦割り行政じゃない我々一般市民は、あらゆる想定をして一回で工事をしなくちゃいけない。メーターをはめるだけ、工事なしで市の水道契約を可能にしました。

島原はソーメンが有名なのをご存じですか? 島原の乱以降に小豆島から移住民が伝えたんです。多分、日本で二番目に大きな生産地なんです。三輪ソーメンや揖保乃糸ってあるでしょ。あれは実は島原半島提供が多いんですよ。それに使う水で、例えばお菓子屋さんやパン屋さんにもどんどん使って欲しいんです。だって(水は)我々人間が作った訳じゃない。普賢岳が作っている。だから、福岡からも佐賀からも長崎市内からも、見に来るお客さんに湧水を持って帰ってもらう。私の仕事は、来店された遠方からのお客さん(ビジター)をファンにしてリピーターにしていくことなんです。そうしたらまた来るでしょ。でも当店にお金を落とすかは分からない。島原全体に落とせばいい。それが我々にできる観光振興なんです。

店の奥にギャラリーがあつて、中庭があつて、湧水があります。座敷をフローリングにする前は住んでいたんです。敷地の後方にあつた裏の倉庫に居住空間を移して、こっち側で皆さんの食事が出て、奥がギャラリーで作品展をして、左に廊下がありますね。中庭に池があつて、この(床の)瓦も自宅の古いのを落とす時に残っていて敷き詰めたものです。捨てたらそれで終わりだけど、違う(床材としての)廃物利用ができる。だからお金がなくても知恵を絞れば何とかなるということなんです。まちづくりは金がかかるでしょ?と云われるが、要らないってことはないけれど、知恵を絞れば何とかなる。奥の廊下で、コンサートして、大体、観客が60人位集まります。そこで人と人のネットワークもできます。

私、学生の頃、舞台演出やっていたものですから、ここで演劇も上演しました。主役は地元の保育士さんで、お芝居は未経験なのに、テネシー・ウィリアムズの「欲望という名の電車」って知ってます? 主人公の気が狂っていくブランチという難しい役を怖いもの知らずで挑戦したんです。大変感動した、と高い評価を多くの人から頂きました。



今度、スペイン・バルセロナで勉強してきた女性の画家の作品展です。訳が分からないですけど、素敵なんです。こういうことを古い町家の中から発信していく新しいスタイルですね。近代美術館のようなきれいな整備されているところでやるのではなくて。

そして「朗読劇」。他のイベントと一緒にやった『信平走る』です。当店は初代が信平というんですが、この人がなぜ岡山から島原に来たのか？ってことにインスピレーションを得て、東宝の元プロデューサーでブロードウェイからミュージカル「ピーターパン」を持ち込んだ人で、この人は島原出身なんです。その人と一緒に第14話まで作りながら、5代目の私が合計14回朗読しました。



Ⅲ. 島原市の事例②

速魚川を作った15年前に左官屋さんが、漆喰壁に漆喰でレリーフを作る**鰻絵**をしたいって言うんですよ。街中の壁につくると、当時楽しみがなかった時代にそれを見た人がニコッと笑える、慰められる、そういう役割があった。**龍**を作ってくれて、これが評判いいんですよ。鰻絵を扱える左官は九州では8人位しかいないですね。その中の一人が島原に居て、60か61歳位でまだ若い。



島原の行政の方に「ハウステンボスとディズニーランドの違いが判りますかね？」って聞いたらキョトンとしているんですよ。ハウステンボスはオランダの街を再現していて、一度行くじゃないですか。立派だけれどもう行きませんよ。今、民間の経営者がどんどん仕掛けていますけど。ディズニーランドはどうか。何回も行くでしょうか？ファンタジーがあるからですよ。あれは夢を売っているんです。現実のものじゃないでしょ。人間はですね、妖怪とか漫画のキャラクターとかにすごく夢を求めるんですよ。だからお客さんがね、鰻絵を見て、へーってなって、携帯とかで撮って勝手にPRしてくれるんですよ。たったこれだけです。畳1枚位で狭いんですけどそれだけで話題になるんですよ。

うちは町家で湧水が湧いている。水の守り神が龍っていうのは、一目見るだけで判るものです。これは何十年後かに地震があっても残ります。わざわざ我々は、昔の鰻絵を見に大分の安心院とか玖珠まで行くんですよ。鰻絵のマップがあって、それを作った方は相当昔に死んでいるのにね。現在でもずっと夢を与えている。アンパンマンじゃないけど、当時のアンパンマンですよ。

国道沿いの大きな建物に**鰻絵**をしたいと**葬儀屋**のオーナーが相談にきたんです。下絵を武蔵野美術大学講師の工芸家に、粘土で描いてもらった。職人さんが自分で決めたデザ



インは限界があるので、やはりプロに任せた方がいいということで原型を作ってもらった。で、蓮の花がいいだろうと木造の三階建てにやるっていう訳ですよ。デザインカッティングというのは絶対に必要です。出来上がったのがこれ。足場を組んでる時に登ったことがあるんですけど怖かったですよ。ここは三階部分ですよ。島原では少ない木造の三階建てですけど、蓮の葉っぱ一枚が（大きさは）軽自動車1台分位です。こういうことを街中でコツコツ楽しみながらやってきました。

「神農」ってご存知ですか？漢方と農業の神様なんです。左手には鎌、右手には薬草です。市内の薬局から相談を受けて、造形作家が楠の木で彫り、台座はガジュマル風に作って完成し、薬局の入り口に設置しました。この薬剤師から見ると我々の薬漬けは非常に危険で、漢方にしても今の薬にしても長く使っちゃいけない！ってチラシで宣言したんです。すごいですよ。その一つの宣言としてこれを店の入り口にバーンと置いたんです。人間にはもともと自然治癒力があるんです。漢方ですら長く使ったらいけないと。地域には色々な人がいて、色々な相談があります。

営業で申し訳ないですけど「寒ざらし」です。白玉がシロップの中に入っていて、昔からある島原のスイーツですね。それと「かき氷」です。メディアと付き合うやり方はですね、(単に)お金をかけても駄目なんです。ストーリーが要るんですよ。口に入れた時にフワッと溶けるかき氷を作るのたにかき氷機の刃を私が研ぐんです。TVに出て、その作り方を出したものだから、福岡とか大分とかあちこちから電話かかってきて大変だったです。取材に来るじゃないですか。包丁を研いでいる時に、タレントの後ろからテレビカメラが来るんだけど、わざと知らんぷりする。その間に局アナやリポーターが店に入ってくる。一呼吸おいて気付いたぷりする。どういうことかという、このお店は刃物を研いでいる金物屋だとPR出来る。専門店だというイメージをつくと同時に、刃物は研ぎながら大切にずっと使い続けるもんだという、今の日本人が忘れてることをPRするんです。

戦後の日本は使い捨て経済じゃないですか。いつまで続けられるのかな？と金物屋をしていていつも思っている。いい職人さんがどんどん消えている。あと10年位したら本当に世界が注目している日本の職人さんが消えるんですよ。それに対する危機感を私は持っています。だからずーとお客さんに語りかけます。日本の職人技は世界一なんだってですね。



市内に浜の川という、昔から湧水を付近住民が生活に有効利用してるスポットがあって、上流から1番目の水槽は食べ物を洗う、次が食器、最後は洗濯物を洗うというルールがある。ここにある「銀水」は有名で、中村ハツヨシさんというおばあちゃんがいて、店の中がレトロですごく素敵なんです。ここに東京の文化人たちが来てた。この人が亡くなって、それが放ってある。私は議員を使ったりして市議会で「何でここをほっとくんだ。」とガンガン突き上げたんですよ。全然、意識が違う。「はあー？」って。市長は「これは再建できません。終わりです。手をつけられません。」。でも、これを一端壊したら、今の建築基準法とか消防法に引っかかってこれと同じものは二度と造れません。だから、今から重要なことは、こんな古いストックつまり景観資産を壊さないで修復保存してください。次の世代がきっと智慧を出します。絶対に残してください。

IV. 終わりに

「IT革命による世界、日本、地方の激変と地域に生きる我々の意識革命の必要性」ということで、今から先、生き延びていく企業とか地方とか人は、ローカリズム、個性や自分のアイデン

ティティをしっかりと持ってないとダメなんです。グローバリズムとローカリズムの臨界点に身を置く個人、企業、地域が生き残る時代になってきた、と私は思います。

我々日本人は足が短いとか、欧米に対する劣等感とか、東京に劣等感が強い地方は駄目なんです。フランスでは、地方のフランス人はパリを外国だと思ってます。フランスだと思ってません。東京は外国で、日本じゃありません。「東京にあるものが何で鹿児島になかとかや？」と考えている以上はダメ。東京を基準にしている発想はもう止めなくちゃいけない。いつも東京、福岡と比べる。何処までいっても永久に足らない、足らない、足らない、足らない。あるんです。それに気づかないといけません。それにスポットを当てて、知恵を絞ってやれば絶対、活路は生まれる。だから「地方に生きる喜びと誇りを取り戻す」ってのは、今からの地方再生のテーマですよ。

「本当の豊かさって何なのか？」って、再検討しなくちゃいけませんね。それで内閣府発行の『日本 21 世紀ビジョン』という本が数年前に出たんだけど、30 年前から日本経済諮問会議があるでしょ、国内トップのシンクタンク集団。それが出したもので、今後の公共工事に関しては、従来型のスクラップアンドビルド（壊して作る）ではなく【作らない公共工事の推進】なんです。地域に昔から残ってきたものを修復保全して次の世代に引き渡すことに意味と価値があるんだよ、ってことなんです。それを頭に置いてやりたいと思います。

島原は小さい街ですけど、今後、機会があらわれましたら是非、島原市までおいで下さい。お待ちしております。長い時間、聴いていただき大変有難うございました。

V. 質疑応答

(質問)

2つ聞きたい。すごく印象に残った言葉が、登録有形文化財がすごくいいですよ。「銀水」を議員まで動かしてうまくいかなかったのは何か障害があったのか。

もう一つ、島津家墓所の福昌寺跡の裏に、墓碑銘がラテン語で、「明治期に長崎県から連れてきたキリスト教徒の墓」があるが、キリスト教が解かれたはずなのに、なぜ鹿児島に連れて来られて、死んだ人たちの墓があるのかご存知か。

⇒【猪原氏】

銀水のオーナーは亡くなられたが、彼女の高い気品とお店の素朴なメニューとか、店内の雰囲気は島原独特のもので絶対よそにない。JCの若者が、青年会議所主催の「水祭り」の期間だけ1週間借りたいと言って、福岡在住の跡継ぎオーナーのOKを貰ったんです。そうしたら銀水のファンからメディアに復活の話がパッと広がった。水がきらめいている所にローソクの光がぽつんとあって、何ともいえない雰囲気で、暑い夏夜に涼みにくるんですよ。それを毎年やりながら、段々スポットを集めていって、それで「(修復整備は) どうでしょうか？」(オーナーが)「大分傷んでいるけど、まだ大丈夫だ！」ということですよ。修復・修繕ができないかな、というのを今期待している状態です。オーナーも意識が変わってくると思うんですよ。こんなに反応すごかったんだと。しかし、行政の上層部が意識が低く勉強不足だと非常に厳しい障害になります。

登録有形文化財の制度を知ったのは、2001年に新潟の長岡造形大学の宮澤智士教授が島原に古民家調査に来られた時です。十数年前から県内でキリスト教会群を世界遺産にしようとする動きがあって、五島で準備会議が開催された時、招待された教授が「県内で一番、古民家が残っているのはどこですか？」と質問したら島原だとわかった。それから島原市に調査に入り、登録有形文化財を100ヵ所以上作れるって報告書まで出してくれたんです。我々は「登録有形文化財の申請手続きをしたらどうですか？」って、文化庁の最高権威といわれる宮澤教授から提言され、す

ぐに行政に掛け合いましたが、中々してくれなかったんです。役所の担当者は、対象物の所有者にいちいち説明して承諾の印鑑を貰いに行くのが億劫だったんでしょう。やっとしぶしぶ書類を書いてくれたので、我々は手分けして半日で印鑑を貰ってきて役所に提出したらびっくりしてました。登録有形文化財は確かにいいですよ。会計検査は来ないし、建物じゃなくてもいいんですよ、昔から地域にあり親しまれた焼却炉とか、50年以上経ってるという証明ができれば。それをどんどん増やしていけばいいんです。観光振興にも文化財振興の資金創出にもなります。

それと、浦上四番崩れとか、聞いたことはありますか？幕末から明治維新の頃、フランスが長崎に大浦天主堂を作ったんですね。フランス人の神父は、日本には一人の隠れキリシタンもいないと思っていたら、地元の浦上村から数人の村民が訪ねてきて隠れキリシタンだと告白されびっくりした。そしたら、浦上村は全員が隠れキリシタンだった。江戸時代にあれだけ厳しい監視と過酷な弾圧をして根絶やしにしたはずなのに、明治政府は逆に恐怖した。島原の乱みたいなものを起こされたら大変だということで、浦上村の村民全員を改宗させるために熾烈な拷問や投獄、津和野、萩、福山などあちこちに配流して、そこで死んでいった。この浦上四番崩れは明治になってからですよ。子供たちもはだして歩いて遠方まで連れて行かれたんです。見せしめですね。多分、鹿児島に連れてこられた人も、浦上四番崩れの改宗しなかったキリシタンじゃないですかね。何度も言いますが、島津と島原は昔から縁がある訳です。日本の歴史を大きく変えたのはやっぱり薩摩の島津、鹿児島なんですよ。ただ、皮肉ですね。中央集権を作ったのは鹿児島なんですよ。東京を中心にして、廃藩置県で藩の力をなくして、今地方を苦しめている。だから地方は頑張らなくちゃいけない、それも民間人が頑張らないといけない。すみません。長くなりました。